

2013年
第19回 函館港イルミネーション映画祭
第17回シナリオ大賞受賞作品

審査員奨励賞



マリーパソコン相談所
村口知巳



【作者プロフィール】

むらぐち ともみ

東京都在住。2012年、伊参スタジオ映画祭にて審査員奨励賞を受賞。

【あらすじ】

函館の北、のどかな海辺の町に引っ越して来たマリ子は、年寄りばかりの町で、パソコン相談所をはじめめる。

そんなある日、出張サポートを依頼してきた元漁師の積木が「本当は復讐に来たんだろう」とマリ子に言う。

40年前、マリ子が引っ越して来た家には積木の漁師仲間で幼なじみの男とその妻が住んでいた。ある日、積木と漁協仲間の不注意が原因で男の妻がなくなり、男もその後を追って死んだ。葬儀の日、男の孫娘が積木たちに向かって「復讐してやる」と叫んだ。その孫娘こそが、マリ子であると積木はそう思っていた。

だが実際、マリ子は積木の幼なじみの男

とは全く関係がなかった。それを知り絶望する積木。そんな積木にマリ子は罪を償えず死ぬことがあなたが受けるべき復讐なのだと言う。

そして死の間際の積木は、まだ罪を抱えたままの昔の漁協仲間にも復讐してほしいとマリ子に頼み息を引き取る。

その後、マリ子は自分が男の孫娘で復讐に来たと嘘をつき、かつての漁協仲間ではもう老人の家々を回る。老人たちはマリ子に言われるまま、パソコンを設置し出張サポートの契約を結ぶ。

しかし、マリ子にはこの町に来た本来の理由があった。それもまた復讐だったのだ。マリ子がこの町に来たのは、事故で死んだ恋人が憎んでいた男に復讐するためだった。

「でも気がついたら、別の復讐してた」と友人の真司に言うマリ子。その後、本当の復讐相手を殺そうとするが、直前で真司に止められ未遂に終わる。「これだってお前の復讐じゃないだろ」と真司は言い、マリ子は目が覚める。やがてマリ子は殺人未遂で捕まる。

それから四年後、のどかな海辺の町はIT化が進み、シルバーIT企業まで出来た。すべてはマリ子が行った他人の復讐が、この町を全く別なものに変えたのだった。

【登場人物】

藤田マリ子 (30)

パソコン講師

積木善二郎 (40・78)

マリ子の顧客

横山真司 (30)

マリ子の友人

秋川みつゑ (20・78)

マリ子の顧客

藤田洋一郎 (47)

善二郎の幼なじみ

藤田静子 (49)

洋一郎の妻

間宮 (61)

マリ子の顧客

乃木 (47・85)

マリ子の顧客

金目 (58)

マリ子の顧客

前川 (37)

新聞記者

松本 (31)

新聞記者

塚本 (27)

介護士

ツナ代(69)

美容師

望月(42)

マリ子の不倫相手

洋一郎の息子(27)

洋一郎の孫娘(7)

霊柩車の運転手

医者

パソコン教室の生徒A

パソコン教室の生徒B

○国道278号線・南茅部（2013年）

と助手席の松本（31）。

T「2013年」

松本「こんな出だしでどうです？」

噴火湾に面した海岸線。

前川「大げさだよ。地方紙のコラムだぞ」

函館市北部、南茅部地域にある、のどかな海辺の町。

松本「いやでも、IT都市函館をアピールするにはこれくらいインパクトある方が

一台の車が走っている。

……てか、市街地から離れすぎじゃない

松本の声「近年、IT人材の育成やIT企業

すつか」

業誘致に力を入れてきた函館市。そして、

前川「函館は函館だろ」

ここへ来て、ついに函館発のIT系シル

松本「本当にあるんですか、こんなところに

バー人材会社が誕生した。コンピューター

IT企業なんて？」

ーおばあちゃん、コンピューターおじい

前川、ダッシュボードから資料を出し、松

ちゃん時代の幕開けが今、この函館から

本に投げる。

始まるうとしている」

松本「ん？ これ市の統計データじゃない

っすか」

○車・車内

前川「その右から二番目の統計」

運転している地方紙記者の前川（37）

松本「（見て）え！ 何すか、この数値」

前川「高齢者のPC利用率87%、今、俺らが走ってるこの地域だ。この辺だけ異常に高いんだよ」

松本「マジすか……」

窓の外を見る、松本。

タブレットPCを操作しながら歩く老人や家の縁側でノートPCを操作している老人の姿が見える。

○空き地

国道沿いの空き地。

車を停めて降りる、前川と松本。

松本「なんもないですね……」

前川「カーナビだと正確な場所着けないから、近くに來たら連絡くれって」

松本「どんなIT企業すか、それ……」

前川、携帯をかけようとするが、ふと、空き地の真ん中にポツンと立つ、古い一軒家に目を止める。

電話を止め、一軒家に向かう、前川。

松本「どこ行くんですか、前川さん？」

玄関に「貸家」の貼り紙。

前川「ほんの少し前まで、ここも、ごくありふれた漁師町だったんだ」

松本「見た目は今もそんな感じですね」

前川「なあ、松本。四年前、この町で殺人未遂事件があったの知ってるか？」

松本「え？ いや、俺、その頃まだ東京いたんで」

前川「犯人は三十代の女」

前川、玄関の近くに落ちていた何かを拾う。

前川「五年前、その女はこの町に引っ越して来た」

前川が拾ったのは、潮風で錆びた看板。

前川「そして、パソコン相談所を始めたんだ」

かすかに見える「マリーパソコン相談所」の文字。

タイトル「マリーパソコン相談所」

○国道278号線・南茅部（2009年）

T「2009年」

側面に「横山電機店」と書かれた軽トラックが走っている。

運転する、横山真司（30）。

助手席にはショートヘアの藤田マリ

子（30）が座っている。

真司「あれ、どこ曲るんだっけ？」

マリ子「あのポスト、左」

真司、ハンドルを切る。

真司「今月すげえな。契約もう五件だけ。

そのノート、どういう名簿なんだよ。百

発百中じゃん」

マリ子の膝の上に一冊の古いノート。

マリ子「企業秘密。今度、気が向いたらね」

真司「ケチ。まあいいけど、俺も便乗させ

てもらってるし」

○間宮家・表

真司の軽トラックが停まる。

○軽トラック・車内

降りる、マリ子と真司。

○同・玄関

チャイムを押す、マリ子。

パジャマ姿の老人、間宮（61）が扉を開けて顔を出す。

訝しげにマリ子を見やる、間宮。

マリ子「こんにちは。マリーパソコン相談

所です」

間宮「ああ？」

マリ子「おじいさんの家、パソコンありますか？」

間宮「ああ？」

マリ子「パソコン、パーソナルコンピューター、PC」

間宮「ああ？」

マリ子「（キーボードを叩くゼスチャーで）

機械」

間宮「そんなもん、ない」

マリ子「じゃあ、この機会にどうです、機械？

あ、すみません、ダジャレ言ってます
いました」

間宮「……帰れ」

扉を閉めようとする、間宮。

が、マリ子、強引に足を入れて止める。

マリ子「ちょ、ちょっと待って……」

間宮「警察呼ぶぞ」

と、マリ子、間宮の耳元に口を近づけ何かを囁く。

間宮「！」

ビックリした顔でマリ子を見る、間宮。

マリ子「真司、デスクトップ一台持ってきて」

真司「え、買うって言った、今？」

マリ子「それではお邪魔します」

間宮「……」

マリ子、間宮の家に上がっていく。

○同・居間

パソコンを設置している、マリ子。

間宮、後ろで黙って見守る。

外の庭で真司が回線工事をしている。

マリ子「インターネットも一緒に開設しま

すので、今日からネットし放題ですよ」

間宮「……」

マリ子「セキュリティ対策はどうします？」

間宮「……」

マリ子「じゃあ適当にやっておきますね」

× × ×

マリ子、間宮をパソコンの前に座らせ、パソコンを起動する。

マリ子「これがキーボードでこれがマウス。

出張サポートは初回のみ無料で、二回目

以降は一回一万円です」

マリ子、名刺を渡し、

マリ子「マリーパソコン相談所の藤田マリ

子です。わからないことがあれば、いつ

でもご連絡してください」

間宮「……」

○藤田家・表

国道沿いの空き地の真ん中にぽつん

と建つ、古い一軒家。

玄関の横に「マリーパソコン相談所」

の少し錆びた看板。

真司の軽トラックが停まる。

降りる、マリ子。

真司「今日、飲みに行かない？」

マリ子「ごめん、まだ出張サポート一件残

ってる」

真司「誰？」

マリ子「乃木さん」

真司「死にかけの爺さんだろ。もうクリッ

クも出来ねえんじゃねえの」

マリ子「やめなよ、そういうの」

真司「冗談、フラれて拗ねただけ。じゃあ、

また明日な」

マリ子「うん、また明日」

真司、車を出す。

○乃木家・表

マリ子、自転車で来る。

○同・前

チャイムを押す、マリ子。

介護士の塚本（27）が扉を開ける。

マリ子「マリーパソコン相談所です」

塚本「また、あんたか……（ぶつぶつ）あ

の爺さん、いつ呼んだんだ」

マリ子「では、失礼します」

と、入ろうとするマリ子を遮り、

塚本「アンタ、評判悪いよ」

マリ子「はい？」

塚本「年寄り相手にパソコン売りつけるな

んて詐欺と同じだろ」

マリ子「……さあ、どうでしょう」

塚本「パソコンのサポートって言いながら、
本当はジジイ相手にスケベなサポートや
ってるってウワサだけ」

マリ子「……」

塚本、マリ子に接近して、

塚本「欲求不満なら俺が相手してやろう
か？」

と、マリ子、鼻をつまみ、顔を背ける。

塚本「……何やってんだ？」

マリ子「……におい」

塚本「……」

塚本、ひきつった顔で一步後ろへ下
がる。

マリ子「……すみません」

看護ベッドで寝ている、乃木（85）。
虚ろに天井を眺めている。

お腹の位置のベッドの食事台に、ノ
ートパソコンが置いてある。

塚本、襖を開けて、

塚本（慥然と）乃木さん、いつものパソコ
ンの人、来たよ」

乃木「ああ……」

マリ子、中に入る。

マリ子「こんにちは」

塚本、マリ子を睨み、ボタンとドア
を閉めて向こうへ行く。

マリ子「お加減どうですか？」

乃木「よくはない」

マリ子「……そうですか」

マリ子、ノートパソコンを開き、乃

木の手を持ち上げて、キーボードの上
上に置く。

マリ子「じゃあ、いつものようにログイン

IDとパスワード入力してください」

乃木「ああ……」

乃木、動作はゆっくりだが、手慣れた
操作で、キーボードを打つ。

マリ子「今日は何かやりたい事あります

か？」

乃木「……インターネット」

マリ子「いいですよ。何、調べます？」

乃木「安くて、いい葬儀屋」

マリ子「……面白いなあ」

マリ子、マウスを持つ乃木の手に手
を重ね、クリックする。

パソコンの画面をじっと見ている、
乃木。

と、咳こんで、マリ子、背中をさする。

マリ子「今日は、ここまでにしませう」

乃木、遠くにある小物入れの引き出しを指差す。

マリ子、引き出しを開けると、白い封筒が入ってる。

中を見ると数枚の一万円札。

マリ子「ちよつと多いですね」

乃木「アンタには世話になった……」

マリ子「評判悪いですが」

乃木「若い奴らは何も知らんからだ」

マリ子「……」

マリ子、封筒をカバンにしまう。

乃木「その代わり、アンタの手、もう少し

× × ×

触らせてくれ」

マリ子「……」

乃木「老いさき短い命だ。若い肌が恋しい」

マリ子「若くはないです……」

乃木「嫌ならいい」

マリ子「……いいですよ。じゃあ、今日は

特別サポートしましょうか？」

と、乃木に背を向ける、マリ子。

乃木「……」

マリ子「こっち見ないでください」

スカートに手を入れる、マリ子。

そのままゆつくり下着を降ろす。

じっと見ている、乃木。

生唾を飲み込む、塚本。

○同・寝室

乃木、マリ子の下着を持ったままじつと見ている。

やがて、パジャマの中に隠し、

乃木「天使の贈りものだ」

マリ子「え？」

乃木「善二郎が言った。天使が贈りものをくれたって」

マリ子「天使じゃありません……」

乃木「いや、アンタは善二郎がずっと待ち

焦がれていた天使だった」

マリ子「……悪魔の間違いじゃないですか？」

○同・廊下

戸の隙間から塚本が覗いている。

○函館駅（2008年）

T「2008年」

スーツケースを持って駅舎から出て来る、ロングヘアのマリ子。

駅前のタクシーの運転手メモを見せる。

スーツケースをトランクに入れ、タクシーに乗り込む。

○国道278号線・南茅部

海岸線の道を走るタクシー。

後部座席から窓外を眺める、マリ子。

○藤田家・表

タクシーが停まり降りる、マリ子。

空き地の真ん中にポツンと建つ、

古い一軒家。

○同・玄関

色褪せた表札に「藤田」という文字がかすかに見える。

マリ子、立てつけの悪いドアを開け、中に入る。

○同・居間

入って来る、マリ子。

雨戸が閉められ、中は暗い。

マリ子、雨戸と窓を全開にし、明かりを入れる。

部屋の中は埃だらけで、長い間、人が住んでいなかった廃墟感。家具は残されたまま。

筆筒の引き出しを開ける、マリ子。

中は空だが、ある引き出しに一枚の色褪せた写真を見つける。

藤田洋一郎（47）と妻の静子（49）の写真。布団の中で半身を起こした静子とその隣でほほ笑む、洋一郎。静子も笑みを浮かべているが、どこか弱々しい。

マリ子「……」

○同・表

「横山電機店」と書かれた一台の軽トラックが停まる。

真司が降りて来る。

○同・玄関

真司、開けっぱなしの玄関に向かつて、

真司「こんにちわー、インターネットの回線工事に来ましたー」

マリ子が来て、

真司「インターネット……あれ？」

マリ子「久しぶり、真司」

真司「え……マリ子？」

マリ子「ビックリした？」

○同・居間

マリ子は掃除、真司は作業をしながら、

真司「え、マジ？ 祖父さん家なの、ここ？」

マリ子「うん」

真司「でも専門学校の時は、そんなの全然

言わなかっただろ」

マリ子「まあ、いろいろね……」

真司「おかしいなって思ったんだ、俺。ネット回線の代理店ならもつと近くにあんのに、なんでわざわざウチに頼んだのかなって」

マリ子「真司が実家の電気屋さん継ぐって

言ってたの思い出して」

真司「これでも今、社長だぜ」

マリ子「全然、見えない」

真司「うるせえ」

マリ子「ねえ真司んとこって、中古のパソコン

置いてない？」

真司「いや、ウチはないけど、知り合いの

業者に頼めば、何するの？」

マリ子「うん、ちよっと」

○同・表

真司の軽トラック、帰っていく。

マリ子、玄関横に真新しい看板をかける。

「マリーパソコン相談所」

看板を掛け終え、新しくやって来た土地をぐるり見回す、マリ子。

と、少し離れた場所に、積木善二郎

(78)がいる。マリ子と目が合う。

善二郎、じつとマリ子を見ている。

マリ子「あ、こんにちは。わたし、今度こ

こでパソコンの相談所を始めました……」

善二郎「……」

マリ子「あ、藤田マリ子です」

が、善二郎、踵を返し立ち去る。

マリ子「……」

○同・居間

埃が払われ、どうにか人が住めるくらいには片づけられている。

ちゃぶ台の上には、ノートパソコンと「パソコン出張サポート マリー パソコン相談所」と印刷されたチラシの束。キャッチフレーズは「パソコンは何でもできる魔法の箱」。

○函館市街・居酒屋

飲んでいる、マリ子と真司。

真司「無理無理、あんな場所。年寄りばっかだつて」

マリ子「そうかな？」

真司「そうだよ。あんな所じゃなくて、こっち来いよ。知合いにスクールやってん

のいるし紹介するよ」

マリ子「ありがとう。でもね、あの場所じゃないとダメなの」

真司「なんで？」

マリ子「なんでも」

真司「意味わかんねえ」

マリ子「もういいから、飲もう。9年振りくらい？」

真司「だな。結局、情報系の専門出て、ち

ゃんと役立ててんのマリ子くらいだよ」

マリ子「真司だつて少しは関係あるよ」

真司「全然、ほとんど雑用。ま、たまにPCの不具合直してお小遣いくれるし、多

少は得してるかな」

マリ子「そういう、ちゃっかりな感じ変わるんない」

真司「マリ子だって変わんないよ、その感じ」

マリ子「どの感じ？」

真司「その落ち着いた感じ」

マリ子「落ち着いてた？」

真司「落ちついてたよ。てか、俺、マリ子

が怒ってんの一度も見たことないよ」

マリ子「ふくん、そうかな……」

真司「そうそう。やっぱ、何も変わってね

えんだな、俺ら」

○ホテル・客室

ベッドの中、裸で寄り添うマリ子と

真司。

真司「なんか、不思議。学校んときは、た

だの友達でさ、こんなのありえねえって

感じだったのに、久しぶりにあって、な

んか自然にこんなふうになっていうか……」

マリ子「じゃあ、やっぱり変わったんだよ、

わたしたち」

真司「そうか……」

余韻に浸る、真司とマリ子。

マリ子「ねえ、真司」

真司「ん？」

マリ子「わたし、憎しみって感情がよく分

からないの」

真司「は？」

マリ子「今まで誰かをちゃんと憎んだりし

たことない……気がする」

真司「……それっていい事じゃん」

マリ子「そうかな。人をちゃんと憎めない

のって人として欠陥じゃない？」

真司「……」

マリ子「でもみんなそう言うんだ。マリ子
が羨ましいって。でもそのあと、何だコ
イツ、って顔する」

真司「俺は別にそんなふうには……」

マリ子「でも、一人だけ可哀想って言っ
てくれた人がいたの。憎しみを持ってないの
は可哀想だって」

真司「……」

マリ子「心が軽くなった。嬉しかったの。

でもその人、わたしには、すごく近くて
遠い存在の人だった」

真司「……マリ子、東京で何かあったの？」

マリ子「……」

真司「確か、パソコンスクールに就職した
って」

マリ子「……真司、わたし不倫してたの」

真司「……」

マリ子「そのスクールの生徒だった人。先
生と生徒の禁断の恋。なんて、向こうは
10コ上のサラリーマンだけど」

真司「……」

マリ子「その人が言ってくれたの。憎しみ
を持ってないので可哀想だね、僕の憎し
みをわけてあげるよって」

真司「……」

マリ子「でもいなくなっちゃった」

真司「もしかして奥さんに？」

マリ子「ううん、死んだの。交通事故で、
ある日突然」

真司「……」

マリ子「でもね、その人から分けて貰った
憎しみ、まだ持ってたままなんだ」

○住宅地・南茅部

マリ子、自転車に乗り、ポストにチラシを入れて回る。

庭の畑を手入れしていた住民のおばさんが、マリ子を訝しげに見ている。

マリ子、チラシを持って来て、

マリ子「あの、よかったら……」

が、おばさん、警戒するようにそそくさと家に戻る。

マリ子「……」

○ツナ美容院・表

寂れた外観。

来る、マリ子。少し躊躇して中に入る。

薄暗い。

マリ子「すみません」

誰もいない。と、すぐ近くで、

ツナ代の声「何の用だい？」

マリ子「わッ」

入口横の椅子にツナ代（69）が座っている。

マリ子「あ、あのよければ、ここにチラシ置かせてもらっていいですか？」

マリ子、チラシを複数枚渡し、

ツナ代「（見て）……」

マリ子「パソコン相談所です。パソコンの設置とか講習とかなんでも……」

ツナ代「（つき返し）客なんか来ないよ」

マリ子「……あ、じゃあ今度、髪の毛切ってもらってもいいですか？」

○同・店内

ツナ代「嫌だね」

マリ子「え……」

ツナ代「中途半端な気持ちで来る奴の髪は

切らない」

マリ子「……よく意味が」

ツナ代「アンタ、何のために、髪を切る？」

マリ子「……みだしなみ？」

ツナ代「違う、女が髪を切るのは、覚悟を

決めたときだけだ。うせな」

マリ子「……」

○藤田家・表

帰ってくる、マリ子。

善二郎が待っている。

マリ子「……あ、あの？」

善二郎「あの、とは何だ。それが客に対す

る口の聞き方か」

マリ子「え？」

善二郎「機械、教えろ」

マリ子「機械？」

善二郎「お前、機械、教えるのが仕事じゃ

ないのか？」

マリ子「え……ああ、はい」

善二郎「あの赤い屋根の家だ、わかるな？」

徹子の部屋が終わったら来い」

善二郎、去ろうとして、振りかえり、

善二郎「俺は、積木善二郎だ」

と、去って行く。

マリ子、善二郎の背中に向かって、

マリ子「あの、機械は？」

善二郎「持ってる！」

マリ子「……」

○積木家・玄関

チャイムを押す、マリ子。

と、家の中から、

善二郎の声「開いてるぞ！」

○同・居間

善二郎、座イスに座って徹子の部屋
を見ている。

マリ子、来る。

善二郎「徹子の部屋が終わってからって言
っただろ」

マリ子「一時半で終わりじゃ」

善二郎「それは、ごきげんようだ！」

マリ子「……すみません」

と、善二郎、天井を指さして、

善二郎「二階の子供部屋にしまつてある。

取つて来い」

マリ子「……」

○同・子供部屋

入つて来る、マリ子。

かつての子供部屋。色々なガラクタ
(主に漁師道具)が乱雑に放りこまれ、
物置小屋のようになっていた。

マリ子「なんで、わたしが……」

足場のない場所を探る、マリ子。

と、奥に黄ばんだ古い型のパソコン
を見つめる。

マリ子、パソコンを引っ張り出そう
として隣に積んであった本の山を崩
してしまふ。

マリ子「ツもう……」

ある本の隙間から一枚の古い写真が出て来る。

ホテルの宴会場のステージで撮った集合写真。「〇〇漁業組合 御一行様の看板。

マリ子、その中に洋一郎の姿を見つける。

○同・居間

パソコンを持つてくる、マリ子。

マリ子「これ、何年前のやつですか？」

善二郎「知らん。息子が送って来た。二十年前くらい前だ」

マリ子「二十年前って……」

マリ子、コンセント差し込み、電源を入れる。

黒い画面に白い文字だけが表示される。

マリ子「あの……」

善二郎「何だ？」

マリ子「これ、古すぎます」

善二郎「……」

○同・表

真司の軽トラックが停まっている。

真司、荷台から中古のパソコンを降ろす。

真司「中古でも三年前のだし、普通に使う分には全然問題ないよ」

マリ子「ありがとう。あとは私やるから」

真司「気をつけるよ、あれぐらいの爺さんが一番エロいから」

マリ子「大丈夫だって」

○同・居間

善二郎、ワイドショーを見ている。

パソコンを設置している、マリ子。

マリ子「本当にいいんですか？ 中古って
いつでも四万円くらいしますよ」

善二郎「構わんと言ってるだろ！」

マリ子「(小声で) 怒鳴らなくても……」

善二郎「ん、何か言ったか？」

マリ子「……いえ、あ、積木さんて、昔、

漁師されていたんですか？」

善二郎「それが何だ」

マリ子「いや、どうしてパソコン始めよう

なんて思ったのかなと」

善二郎「白々しいこと言うな」

マリ子「はい？」

善二郎「わかってるんだ、何もかも」

マリ子「……何がですか？」

善二郎「お前、洋一郎さんの孫だろ？」

マリ子「……洋一郎？」

善二郎「藤田って名乗っただろう。藤田洋
一郎だ……違うのか？」

× × ×

フラッシュ。

藤田家のダンスで見つけた、洋一郎
の写真。

× × ×

マリ子「そう……です。そうか洋一郎でした。
ずっとお祖父ちゃんとしか呼んでなかつ

たので」

善二郎「お前を見れば、すぐにわかる」

マリ子「似てますか？」

善二郎「その目だ」

マリ子「目が似てるんですか？」

善二郎「お前、俺をからかっているのか？」

マリ子「いえ全然……」

善二郎「お前が何をしに来たかくらい、す

べてお見通しなんだ」

マリ子「……え？」

善二郎「復讐に来たんだらう？」

マリ子「……」

○金目家・居間（2009年）

金目（58）にパソコンの操作を教え
ている、ショートヘアのマリ子。

いやらしい目でマリ子を見つめる。

マリ子「じゃあ、ここをクリックしてください」

金目「俺はアンタをクリックしたいな」

マリ子「出来ません」

金目「ウソつくな、他のジジイにはスケベ

なサービスやってんだろ。知ってんだ」

マリ子「はい、今度はこつちを右クリック」

金目「何、右のオッパイが感じるのか」

マリ子「じゃあ今日はこれで……」

金目「悪かった、帰るな。ちゃんとする」

マリ子「……」

金目「でも、ほんとはあるんだろ、特別サ

ポート？」

マリ子「……じゃあ、もう一度呼んでもら

えると、何かあるかも」

金目「ほんととか、ほんとだな！ よしわか

った約束だぞ！」

マリ子「……」

○乃木家・玄関

葬儀の玄関飾りがされている。

○同・居間

祭壇に乃木の遺影。

焼香をする、マリ子。

× × ×

会葬者に精進落としが振舞われている。

マリ子の向かいに座る、塚本。

塚本、酔いが回り、マリ子を下卑た

目で見ている。

塚本「おい、パソコンエロ女」

マリ子「……」

塚本「俺は見たぞ。みなさん、この女は乃木さんに、下着を脱いでエロいことして

たんです！」

マリ子「……」

塚本「この女、パソコン教えながら、ジジイにスケベなサービスしてたんだ！」

と、マリ子の隣の秋川みつゑ(58)が、

みつゑ「あら、介護士さん、酔っぱらって妄想が膨らんだのね」

塚本「いや、俺はこの目で」

みつゑ「ダメよ、性は外に発散しなくちゃ。

でも誰にも相手にされないんじゃないや仕方ないわね。よければ、おばあちゃんが介護

しましょうか？」

塚本「なんだと、くそババア！」

みつゑに向かって行く塚本を会葬者

たちが抑えて連れ出す。

○みつゑの家・居間

パソコンの前に座る、みつゑ。その横に、マリ子。

マリ子「昨日はありがとうございました」

みつゑ「いいのよ。あの介護士、口は臭いし、前から評判悪かったの。昨日のことで、もうこの地域には来れないわね」

マリ子「今日は何やりますか？」

みつゑ「最近、ビジネスニュースでやっているクラウドっていうの、あれ何？」

マリ子「ストレージサービスですね。データの实体がどこか分からない場所にあつて、でも、いつでもどんな場所でも取りだせるんです」

みつゑ「なんかスフィックスの謎かけみたいで面白そう。わたしに理解出来るか

な」

マリ子「大丈夫ですよ。みつゑさん覚えるの早いし」

みつゑ「パソコンってわたしに、すごく合ってる。わたし、生まれてくるのが早すぎたのよ」

マリ子、ほほ笑む。

と、みつゑ、マリ子の手を握って、

みつゑ「マリ子さん、わたしね、あなたのこと好きよ」

マリ子「え……あ、わたしも好きです」

みつゑ「そういう意味じゃないの」

マリ子「はい？」

みつゑ「カミングアウトしていい？」

マリ子「……はい」

みつゑ「わたし、レズビアン」

マリ子「え？」

みつゑ「こんなおぼちゃんがレズじゃおかしい？」

マリ子「いいえ全然……」

みつゑ「おかしいわよ。こんな小さな町でレズビアンなんて知られたら、生きていけないわ」

マリ子「……」

みつゑ「二十歳の頃、一度、結婚したんだけど、全然だめ。男の人をどうしても愛せなかった」

マリ子「……」

みつゑ「カミングアウトしたの、あなたが

二人目よ」

マリ子「どうしてわたしに？」

みつゑ「あなたが好きだから」

マリ子「……ごめんなさい」

みつゑ「大丈夫。別に取って食べようなんて考えてないから。その代わり、ひとつ欲しいものがあるの」

マリ子「……何ですか？」

みつゑ「マリ子さんのパンティ」

マリ子「……」

みつゑ「特別サポートあるのよね？」

マリ子「……ないですよ、そんなの」

みつゑ「初めてカミングアウトした相手、善さんなの。病院で意識が朦朧としたとき、試しに言ってみたの」

マリ子「……」

みつゑ「(思い出し笑い) そしたら善さん、真面目な顔してこう言うのよ。あなたから、パンティ貰えばいいって」

マリ子「……」

○積木家・居間（2008年）

パソコンの前に座る、善二郎。

その隣にロングヘアのマリ子。

マリ子「何かパソコンでやりたいことあります
ますか？」

善二郎「マリーパソコン相談所」のチラシ
を突き出して、

善二郎「魔法の箱なんだな？」

マリ子「……はあ」

善二郎「病院へ連れて行け」

マリ子「いや、それは」

善二郎「なんだ、なんでも出来るんじゃない

いのか！」

マリ子「……」

○国道278号線・南茅部

マリ子、善二郎を自転車の荷台に乗
せて走っている。

○診療所・待合室

ベンチに座る、マリ子と積木。

マリ子、息を切らしている。

積木、名前を呼ばれ、診察室に入る。

マリ子、携帯電話をかける。

マリ子「あ、真司？」

○積木家・表

真司の軽トラックが停まっている。

荷台にマリ子の自転車。

荷台の自転車を降ろす、真司。

積木、さつさと家の中に入っていく。

マリ子「じゃあ、工事、お願いね」

真司「いいのかよ、勝手にやって？」

マリ子「うん、たぶん大丈夫」

○同・居間

テレビを見ている、善二郎。

マリ子、来て、

マリ子「お医者者さん、連れて行きましたよ」

善二郎「パソコン関係なかったな」

マリ子「……」

善二郎「じゃあ、次は料理だ」

マリ子「はあ？」

善二郎「なんだ、それも出来んのか？ パ

ソコンってやつは何も出来ないじゃない

か」

マリ子「……」

○同・居間(夜)

マリ子、善二郎、真司、鍋を囲んで
いる。

真司「やっぱり、みんなでひとつの鍋をつ
つつくのつていいな。なんか、俺たち家
族みたいだよな」

マリ子「……」

善二郎「……」

真司「……」

と、善二郎、いきなり箸をバンと置き、
善二郎「いったい、お前はいつになったら、
復讐はじめるんだ！」

マリ子「大きな声出さないでください。今、
食べてるんです！」

○軽トラック・車内(夜)

運転する、真司。助手席にマリ子。

真司「今日はなんかすげえ貴重なもの見た」

マリ子「え？」

真司「だってマリ子があんな風に怒ってる

の見たことなかったし」

マリ子「わたし、怒ってた？」

真司「怒ってただろ？」

マリ子「ごめん覚えてない」

真司「……まあ、あの爺さん何か変だよな。

いきなり復讐とか」

マリ子「(ボソッと) どうしてわかったんだ

ろう？」

真司「え？」

マリ子「……何でもない」

布団で眠っている、マリ子。

電話が鳴って起こされる。時計を見

ると、朝の五時。

マリ子「……もしもし」

善二郎の声「もしもしじゃない、はい、こ

ちら、マリーパソコン相談所です、だろ」

マリ子「……営業時間外です」

善二郎の声「そんなの知ったことか。今日

も来い、いいな」

ガチャンと電話が切られる。

マリ子「……」

○積木家・居間

パソコンの前に座る、マリ子と積木。

マリ子「何かやりたいこと……」

積木「(遮って) とりあえず病院だ」

○マリーパソコン相談所・居間 (早朝)

マリ子「わかりました」

マリ子、携帯電話をかける。

マリ子「あ、あの……藤田です……はい、

昨日お願いしてた件……あ、はい、デスクトップのカメラのマークのアイコンをクリックして……あ、大丈夫ですか……

じゃあ、お願いします」

積木「何やってる？」

マリ子、電話を切ると、今度はパソコンのアプリを起動する。

と、画面の向こうに診療所の医者が現れる。

医者の声「あ、本当だ、映った。へえこんな機能あったんだ。あ、積木さん、今日はどうぞされました？」

善二郎「……」

× × ×

医者の声「じゃあ、本当に病気になったら来てね。一度、心臓で倒れてんだから、無理しちゃだめだよ」

マリ子「ありがとうございました」

マリ子、アプリを終了させる。

積木「……」

マリ子「なんでも出来ましたね」

積木「うるさい！ じゃあ、朝飯作れ」

マリ子、ブラウザを起動し【朝ご飯】と入力して、画像検索ボタンをクリックする。

画面に表示される、様々な朝ご飯の画像。

マリ子「用意しました。後はこの中から好きなものを出して食べてください」

善二郎「お前は一体さんか！」

マリ子「……」

善二郎「わかった、俺の負けだ」

マリ子「いや勝負とかじゃ……」

善二郎「負けは負けだ。お前に宝の地図を

やろう」

マリ子「はあ？」

善二郎、小物入れの引出しを開け、

黄ばんだ一枚の紙を取り出す。

ラフなタッチで描いた函館の地図。

函館山の海側に大きくバツ印が書か

れている。

善二郎「寒川村と呼ばれてた場所だ。昔、

そこにお宝を隠した。小さな箱に入っ

る。見つけたらお前にも分け前をやるか

ら取って来い」

マリ子「……」

善二郎「どうした、パソコンは何でも出来

るんだろ？」

マリ子、宝の地図を善二郎に突き返し、

マリ子「いい加減にしてください！ こん

な適当な地図で探せません」

善二郎「……」

マリ子「いったい、何なんですか？ そう

ですよ、パソコンなんてただの箱ですよ。

メールだって、インターネットだって、

ワープロだって、そんなの、もともとこ

の世になかったんです。なければないで、

生きていきますよ！」

善二郎「じゃあ、何でパソコンの仕事なん

てやってる」

マリ子「……」

善二郎「俺は四十年、漁師をやってきた。

仕事に誇りを持っていた。自分の仕事に誇りを持ってないようじゃ生きてる意味なんかない」

マリ子「……」

○函館山と山道

ロープウェイから降りて来る、マリ子。眼下に広がる函館市街。

マリ子、展望台には向かわず、遊歩道へ出る。

リュックからタブレットPCを出し、テレビ電話アプリを起動する、マリ子。

自宅にいる善二郎の顔が映る。

マリ子「これなら、あんな適当な地図より

役に立ちます」

善二郎「俺自身が地図か……」

マリ子「それで、どこに行けば？」

善二郎「まずは、その道をまっすぐ行け」

× × ×

タブレットPCの画面を進行方向に向けながら山道を行く、マリ子。

善二郎「よし、その辺に立入禁止の看板があるはずだ」

周囲を確認する、マリ子。ロープが張られ「この先危険。立入禁止」と書かれた看板がある。

マリ子「危険って書いてます」

善二郎「その先の道を下っていけば、山の斜面に出る。ロープが張ってあるからそれで降れば海側に出れる。マムシには気

をつける。運が良ければトドに会えるかもしれないぞ」

マリ子「あの、聞こえてますか？ 危険つて書いてます」

○山の斜面

マリ子、ロープを頼りに、山の急斜面を降りる。

マリ子「(ぶつぶつと) マムシなんて聞いてないし、トドになんて会いたくない」

○海岸

マリ子、旧寒川村近くの海岸に出る。

ゴツゴツとした石で覆われた海岸。

さまざまな漂着物が流れてきている。

息が切れ、その場に座る、マリ子。

タブレットPCを出し、善二郎に周囲を見せる。

善二郎「よし、左手に歩け。何をやってる、休んでる暇はないぞ」

マリ子「……」

○旧寒川村跡

かつて海岸の崖下にあつた旧寒川村跡。

集落の面影なく、当時の石垣がわずかに残っているのみ。

マリ子、来る。

善二郎「その先の岩の先端を指せ」

マリ子「まだ……歩くんですか」

先を進む、マリ子。

やがて、洞窟が見える。

中は暗く、狭い。

善二郎「よし、その洞窟だ」

マリ子「……」

○洞窟

マリ子、懐中電灯を照らしながら、一人が通れるほどの狭い通路を進む。やがて行き止まりに来る。

マリ子「行き止まりです」

善二郎「丸い石を探せ。表面に傷があるやつだ」

マリ子、地面を照らし探す。

と、表面に×印が掘られた丸い石を見つめる。

善二郎「よし、それだ、その下を掘れ！」

マリ子「怒鳴らないでください！」

マリ子、リュックからスコップを出して掘る。

やがて硬いモノに当たる。

掘りだして見ると、お弁当箱くらいの大きさの四角い缶。

善二郎の声「よし、やったぞ！ まだあつたんだ！」

力が抜けへたり込む、マリ子。

○積木家・居間(夜)

宝箱の前に、マリ子と善二郎。

善二郎「開ける」

マリ子、箱を開けようとするが、錆びついてなかなか開かない。

グツと力を入れる。と、フタがはじけ飛び、中の物が勢いよく空中に飛

び出す。

バランスを崩し倒れる、マリ子。

たくさんのパンティが空中を舞う。

マリ子「何これ……」

善二郎「どうだ、すごいだろ。こう見えて、

若い頃はモテモテで、付き合う女たちか

らパンティを貰った。いわば戦利品だ。

それを結婚する前、あの洞窟に隠したん

だ」

マリ子「……」

善二郎、パンティの一枚一枚を取り

ながら、

善二郎「これは珠美、安江、牧子、懐かしい。

よし、お前にも好きなのやるぞ」

と、マリ子、箱を思いつきり壁に投

げつける。

マリ子「ふざけんな、ジジイッ！」

善二郎「……」

マリ子「なにがパンティよ。これ取って来

るのにどれだけ苦労したと思ってるの！」

善二郎、マリ子を見つめ、

善二郎「どうだ憎しみは湧いて来たか？」

善二郎を睨む、マリ子。

善二郎「そうだ、復讐は憎しみと共にだ。

早く俺に復讐しろ。俺は、この日が来る

のをずっと待ってたんだ！」

マリ子「復讐、復讐って何で積木さんに復

讐しなきゃいけないんですか！ わたし

の復讐は……」

と、善二郎、突然、胸を抑えてその

場にうづくまる。

マリ子「そうやって、また、からかうんで

すか？ いいですね、いつも楽しみがある、ねえ積木さん……積木さん？」

マリ子、善二郎を揺さぶると、ドサツと崩れ落ちる。

マリ子「！」

○診療所・待合室（夜）

暗い待合室のベンチで一人座る、マリ子。

人が駆けて来る足音。

みつゑが来る。

みつゑ「（マリ子を見て）あの、ここに積木

善二郎という人が運ばれたと聞いて」

マリ子「今、あっちの部屋で眠ってます」

みつゑ「あなたは？」

マリ子「藤田マリ子です」

みつゑ「あなたがマリ子さん」

マリ子「知ってるんですか、わたしのこと？」

みつゑ「善さんから聞いてた。洋一郎さんのお孫さんなんですよ？」

マリ子「……はい」

みつゑ「善さん、大丈夫なの？」

マリ子、首を振って、

マリ子「明日の朝、大きな病院へ移すそうです。家族の人がいたら知らせてほしいと」

みつゑ、マリ子の隣に座る。

みつゑ「善さんの息子さん、今、札幌なの。

わたしから連絡しておくわ」

マリ子「……ありがとうございます」

みつゑ「わたし、秋川みつゑ。昔、漁協で事務やって、善さんや洋一郎さんには

すごくお世話になったの」

マリ子「……あの、お祖父ちゃんと、積木

さん、何かあったんですか？」

みつゑ「……」

マリ子「何も知らないんです、わたし」

みつゑ「本当に知らないの？」

マリ子「……はい」

みつゑ「何かあったかなんてもんじやない

わ」

マリ子「……」

みつゑ「それに、あれは洋一郎さんと善さ

んだけの問題じゃないの」

○（回想）漁船

海の上に浮かんでいる。

乗組員たちが養殖昆布を水揚げする。

藤田洋一郎（47）、昆布の状態をチェ

ックし、積木善二郎（40）に向かっ

て納得したように頷く。

みつゑの声「当時、わたしたちの町は養殖

昆布の生産で活気づいていて、洋一郎さ

んも善さんもそれに携わっていた一人だ

ったの」

○（回想）藤田家・表

「藤田」の表札。

木枯らしが吹いている。

みつゑの声「冬の間、全国でもまだ珍しか

った養殖昆布の売り込みに各地の物産展

を回る事になって、町は洋一郎さんにも

同行をお願いした。でもそのとき洋一郎

さんには病気で寝込んでた奥さんがいた

の」

○(回想) 同・玄関

善二郎が、洋一郎を訪ねている。

善二郎「だから、静子さんの病院の送り迎えやメシの世話は、組合でちゃんと面倒みるって」

洋一郎「そりゃ悪いよ、善二郎」

善二郎「頼む、昆布のこと一番知ってるの、洋一郎さんなんだ。この町のためだと思ってる」

と、寝間着姿の藤田静子(49)が来て、静子「あなた、わたし大丈夫よ。行って来て」

善二郎「静子さん、具合どうだ？」

静子「ここのところ、大分いい」

洋一郎「うくん、でもな」

静子「もしかして、留守の間、善ちゃんがわたしを口説くんじゃないかって心配してるの？」

善二郎「お、おい、静子さん、俺、もう結婚して子供もいるんだぞ」

静子「あらこの間、浮気がばれて、助けてくれりって、ウチに逃げてきたの誰？」

善二郎「いやあ、それは……でもいくらなんでも先輩の女房にゃ手を出さねえって」

静子「年上の古女房になんて、興味ないって言うの？」

善二郎「そうじゃなくてよ……」

洋一郎(笑い)「しょうがねえな。じゃあ、行ってくるか」

善二郎「そうか、恩に着るよ、洋一郎さん！」

洋一郎「悪いけど、静子のこと頼んだぜ」

善二郎「おう、期待しててくれよ」

洋一郎「だから、そういう言い方、なんか引つ掛かんだろ」

笑い合う、三人。

みつゑの声「真冬の一月、洋一郎さんは静子さんを残して二週間ほど留守にするこ
とになった。冬の嵐がやってきたのは、
その最中だったわ」

○（回想）同・居間（日替わり）

静子「見舞いに来ている、善二郎。」

外では強い風がガタガタと家を鳴ら
している。

善二郎「それで、女房の奴、元町の教会で
も行って懺悔して来いとか言うからよ、
バカヤロ、懺悔するくらいなら、浮気な

なんてしねえよって言ったんだ。そしたら、
もう鬼の形相で大変の何のって」

静子、善二郎の話しに笑いが止まら
ない。と、咳が出る。

善二郎「静子さん、大丈夫か？ ちよつと
長居したな。もう行くからゆつくり寝て
てくれ」

静子「いいの。楽しい話し聞くと元気になる」
善二郎「今日はこれから台風並みの大荒れ
だって言ってたし、帰る時、しっかり戸
締りしてくからよ」

静子「ありがとう、善ちゃん」
と、玄関の扉を強く叩く音。

○（回想）同・玄関

扉を開く、善二郎。

乃木(47)が立っている。

外は雪が吹き荒れている。

乃木「お、やっぱりここか！」

善二郎「なんだ、乃木の親父か」

乃木「なんだじゃねえ。お前、なんで寄り

合い来ねえ」

善二郎「今から行こうと思つてたんだよ」

乃木「若い奴らが喧嘩はじめて大変なんだ」

善二郎「たく、しょうがねえな。この嵐で

血が騒いだか」

乃木「冗談言つてねえで、お前がいねえと

収まんねえから早く来てくれ！」

善二郎「わかつたよ。静子さん、悪いな、

すぐ戻つて来る」

善二郎、乃木と一緒に出て行く。

が、勢いよく閉めたせいで扉が反動

して隙間があく。隙間から冬の寒風

が入る。

静子「あ、ちよつと善ちゃん……もう、し

ようがないわね」

静子、立ち上がつて、扉を閉めに向

かう。

ガタガタと小刻みに揺れる扉。

静子、扉を閉めようとするが、風と

立てつけの悪さでなかなか閉まらな

い。

ぐつと力を入れたその時、突風が吹

き、扉が外れる。

静子「キャッ」

扉の下敷きになつて気を失う、静子。

冬の寒風が容赦なく静子を襲う。

みつゑの声「善さんが戻つて来た時、静子

さんの体はもう冷たくなつてた」

○(回想) 藤田家・表(夜)

扉は元に戻っている。

中から、洋一郎の泣き叫ぶ声。

○(回想) 同・居間(夜)

横たわる妻の亡骸を抱き、泣き叫ぶ、

洋一郎。

洋一郎「しずこー、しずこー」

沈痛な表情で漁協の仲間が囲んでい
る。

善二郎、洋一郎の前で土下座をし、

善二郎「すまねえ、すまねえ、洋一郎さん

……俺のせいだ……」

乃木「いや、俺たちの責任だ。善二郎、心

配だから戻るって何度も言ってたんだ、

それを喧嘩が収まつても、俺たちがまだ

大丈夫だつて引き止めてよ……」

洋一郎「……」

善二郎「……この償い一生かけてさせてく

れ、頼む！」

洋一郎「……罰があたつたんだ」

善二郎「……洋一郎さん」

洋一郎「毎日、美味しいもんやキラキラした

とこ連れて行かれてよ、俺、一瞬このま

ま帰りたくないって思ったんだ。そうだ

よ、ちようどその頃だ、静子、死んだの、

なあ」

善二郎「洋一郎さん、何言つてんだ？」

洋一郎「罰が当たつたんだ……」

○(回想) 国道278号線・南茅部(朝)

海岸沿いの道をみつゑ(20)が走っている。

その後ろを善二郎と漁業組合の男たちが追いかけている。

善二郎「みつゑちゃん、どこで見たんだ!」
みつゑ「こっち!」

○(回想) 海岸(朝)

みつゑ、善二郎、漁業組合の男たち
やってくる。

洋一郎が沖へ向かって和船を漕ぎだしている。

船には静子の遺体が横たわっている。

善二郎「洋一郎さん、何やってんだ!」

洋一郎「……こいつを海に沈めてやるんだ」

善二郎「バカなこと言うな。俺たちでちゃ

んと静子さんの葬式あげさせてくれ」

洋一郎「まかせられるか……」

善二郎「……」

洋一郎「てめえらに、まかせたからこうな

ったんだろ!」

善二郎「頼む、戻って来てくれ」

洋一郎「……善二郎、もう俺らには構わな

いでくれ」

洋一郎、船を漕ぎはじめる。

みつゑ「おじさくん!」

組合の男たち、ただ見送るしかない。

沖合へ遠ざかる、洋一郎。

× × ×

無人の船が漂着している。

みつゑの声「翌日、船は戻って来た。でも、

船には、静子さんも洋一郎さんの姿もな
かった」

○(回想) 藤田家・表

みつゑや善二郎、組合の男たちの前
に洋一郎の息子(27)と妻、その孫
娘(7)が立っている。洋一郎と静
子の骨壺を抱えている。

みつゑの声「それから東京で働いていた洋
一郎さんの息子さんが戻って来た。息子
さんは、わたしたちを責めなかったけど、
一人だけ、許してくれなかった子がいた」
善二郎たちに向かつて、頭を下げる、
洋一郎の息子。
と、洋一郎の孫娘、善二郎たちを睨
んでいる。

孫娘「おじいちゃん、返せ！ おばあちゃん、

返せ！」

息子「コラ、そういう事言うんじゃない」

孫娘「絶対許さない！ お前ら、絶対許さ

ない。復讐してやる！」

息子「やめなさいッ！」

洋一郎の息子、孫娘を無理やり引つ

張って去る。

善二郎「……」

○元の診療所

マリ子とみつゑ。

みつゑ「その後、善さんの浮気症はピタリ
と止まった。でも奥さん、息子さん連れ
て出ていったわ。たぶん浮気なんかより、
今までの善さんじゃなくなった事に耐え

られなかったのよ」

マリ子「……」

みつゑ「さあ、全部話した所でマリ子さん、

あなたにもひとつ聞いていいかしら？」

マリ子「……」

みつゑ「あなた、誰？」

マリ子「え……」

みつゑ「あなた、洋一郎さんのお孫さんじ

ゃないわよね？」

マリ子「……」

みつゑ「わたしが話したのは、今から四十

年近く前の出来事。あなた、とても四十

過ぎには見えない」

マリ子「……」

みつゑ「誰なの、あなた？」

マリ子「いますよ。わたしくらいの見た目

でも四十過ぎてる人って……」

○同・病室

目を覚ました、善二郎。じっと天井
を見ている。

マリ子、入って来て、そばの椅子に
座る。

善二郎「……俺はもうすぐ死ぬのか？」

マリ子「そうですね」

善二郎「ずいぶん冷たいな」

マリ子「心配してもらえるなんて思ったん

ですか？」

善二郎「お前が早く俺に復讐しないのが悪

いんだ」

マリ子「どっちの復讐？ 静子さんを死な

せたこと？ 沖に出る洋一郎さんを引き

止められなかったこと？」

善二郎「……何もかもだ」

マリ子「わかりました。これから復讐します。

でもその前に一言いいですか？」

善二郎「……なんだ？」

マリ子「わたし、本当は洋一郎って人の孫

じゃないんです」

善二郎「……なんで、そんな嘘をつく」

マリ子「嘘じゃありません。姓は同じでも、

あの家とは全然関係のない人間です」

善二郎「お前、孫だって言っただろ。言っ

てることが無茶苦茶だ……ウツ」

善二郎、胸のところを掴み痛みを抑

えながら、

善二郎「だったら、なんであんな目をして

た？」

マリ子「え？」

善二郎「お前はあのとき、何かを追いかけ

て来た目をしてた」

マリ子「……」

× × ×

(フラッシュ)

マリ子が引越して来た日、藤田家

の表で初めて善二郎と目が合う、マ

リ子。その鋭い視線。

× × ×

善二郎「お前は誰だ？」

マリ子「……わたしはある理由があつてこ

の町に来ました。でもそれは積木さんと

は何の関係もありません」

善二郎「……」

マリ子「残念ですが、積木さんが望む復讐

は果たされることはありません」

善二郎「！」

マリ子「あなたが待っていた月日は全て無

駄になります」

善二郎「やめろ！」

マリ子「あなたは罪を償うことも出来ず、

報われないまま、死んでいきます」

善二郎「やめろと言ってるだろ！ お前に

そんなこと言われる筋合いはない！」

マリ子「まだわからないの！」

善二郎「……」

マリ子「それが積木さんへの復讐なんです」

善二郎「！」

布団を頭から被る、善二郎。

その中でむせび泣く。

マリ子「……」

○ツナ美容院・表

マリ子、やって来て中に入る。

○同・店内

入ってくる、マリ子。

入口横の椅子にツナ代が座っている。

マリ子「覚悟、決めました」

ツナ代、マリ子をジロリと見る。

やがて立ち、

ツナ代「座んな」

× × ×

マリ子のロングヘアにツナ代のハサ

ミがかかる。

じつと鏡を見る、マリ子。

○(回想) 総合病院・病室

鼻径チューブをされ、死の間際の善

二郎。目を開けたまま、意識朦朧。

見舞いに来ている、マリ子。

マリ子「札幌に住んでる息子さん、すぐに来てくれたそうですね」

善二郎「……」

マリ子「言ってましたよ。何度も一緒に暮らそうって誘っても聞いてくれなかったって」

善二郎「……」

マリ子、パンティの入っていた宝箱を善二郎の枕元に置く。

マリ子「これ、持って来ました」

善二郎「……こんな干からびたパンツ……

いらん」

と、善二郎、震える手で棚の上を指

さして、

そこには一冊の古いノートが置いてある。

マリ子「(取って)これは？」

善二郎「……当時の漁業組合の名簿……洋

一郎さんと静子さんを知ってる奴らの住所……」

マリ子「……」

善二郎「そいつらにも……ちゃんと復讐してくれ……たのむ」

マリ子「……なんでわたしが？」

善二郎「お前……洋一郎さんの孫たる……」

マリ子「だから、わたしは……」

善二郎「……みんな、あの時の……罪を

……持ったまま……」

マリ子「……」

善二郎「たのむ……救ってくれ……」

マリ子「……」

マリ子、すつと立ち、善二郎に背中を向けると、自分のスカートに手を入れ、下着を降ろしはじめた。

それを横目で見ると、善二郎。

脱いだ下着を宝箱の中に入れて、マリ子。

マリ子「干からびたパンティだけじゃ、可哀想だから」

○元美容院・店内

鏡に映る、ショートヘアのマリ子。

○乃木家・表

マリ子、自転車で来る。カゴの中に

は善二郎から貰ったノート。

○同・玄関

玄関のチャイムを押す、マリ子。まだ元気な頃の乃木が出て来る。

乃木、訝しげにマリ子を見ている。

マリ子「こんにちは。マリーパソコン相談所です」

乃木「なんだ？」

マリ子「おじいさんの家、パソコンあります？」

乃木「セールスマンはお断りだ」

扉を閉めようとする、乃木。

マリ子、足を挟んで止める。

乃木「おい！」

マリ子、乃木の耳元に、

マリ子「わたし、藤田洋一郎の孫娘なんです。

忘れてませんよね、あの日の事？」

乃木「！」

○墓地（2009年）

善二郎の墓前で手を合わせる、シヨ

ートヘアのマリ子と真司。

真司「もう一年か、早いな」

マリ子「……」

真司「よし、じゃあ今日も稼ぎますか」

マリ子「真司、今日でもう終わりだよ」

真司「へ？」

マリ子、手に持っていたノートを見せ、

マリ子「あと一人で終わりなの」

真司「……何で？」

○国道278号線・南茅部

路肩に真司の軽トラックが停まってる。
いる。

○軽トラック・車内

真司「何だよ、それ……じゃあ、マリ子、

あの爺さんに言われて復讐してたって言うのか？」

頷く、マリ子。

真司「年寄りにパソコン買わせて覚えさせるのが復讐なのか？」

マリ子「違う。大事なのは藤田洋一郎の孫娘が昔の約束を果たしに来たって伝える事。パソコンはそのフラグのようなものなの」

真司「……それで本物の孫娘はどうしてん

だよ？」

マリ子「札幌で幸せに暮らしてた。わたし探して電話したの。そしたら復讐なんて言ったこと、スツカリ忘れてた」

真司「それでお前が代わりに復讐……って、おかしいだろ、それ」

マリ子「でももうすぐ終わるんだよ。あと一人で、この名簿にあつて、今も生きている人全員に伝えることが出来るの」

真司「……あのさ」

マリ子「……何？」

真司「じゃあ、マリ子はなんで来たの？」

マリ子「……」

真司「あの家がマリ子の祖父さん家でもな
んでもなかったっていうなら、お前は何
でここに来たんだよ？」

マリ子「……」

真司「そもそもおかしいんだよ、やっぱ。俺らが会ったのって東京の専門学校だ。そんなとき実家は長野って言ってたよな。それがいきなり函館に祖父さんが住んでるって。マリ子、何しに来たんだ、ここに？」

マリ子「……」

真司「なんだよ、そっちは教えられないのか？」

マリ子「……そうじゃない」

真司「……じゃあ言えよ」

マリ子「積木さん、わたしのこと勘違いしてたけど、でもある意味では合ってたの？」

真司「はあ？」

マリ子「復讐に来たんだよ、わたし」

真司「……」

マリ子「前に言ったよね。不倫してた人が
いたって」

○（回想）ホテル・客室

ベッドの中、ロングヘアのマリ子と

恋人の望月（42）。

望月「もしも、もうすぐ死ぬってわかったら、
俺は復讐するかな」

マリ子「復讐？」

望月「ある女の復讐。その女は昔、函館で
芸者やってたんだ。そんな時、よくお座敷
にあがっていた料亭があつて、そこに一
人の使用人の男がいた。いつも女を嫌ら
しい目で見て、女はそいつを心の底から

嫌ってた。ある晩、女はそいつにレイプ

されたんだ」

マリ子「……」

望月「夜の暗がりで待ち構えていた男に、
女は口を抑えられ抵抗することも出来な
かった。翌朝、男は行方をくらました。
女はしばらく男に襲われた事を黙って仕
事を続けた。でもある日、体調に異変を
感じ病院に行くこと妊娠していることがわ
かったんだ」

マリ子「……」

望月「女は誰にも言わず函館を出て行った。
そして東京で子供を産み、夜の仕事をし
ながら子供を育てた。望まれない子供で
も女は愛情を与え、その子供を立派に育
てあげた。でも二年前、女に子宮がんが

見つかった。もう手遅れだった。その時、女は初めて子供に話した。昔、ある男に襲われた事、その時に出来たのがお前だつていう事」

マリ子「……その子供って」

望月「……女は俺のお袋、その子供が俺」

マリ子「……」

望月「入院したお袋は人が変わったようになつた。あの男のせいで人生を台無しにされた、今でも憎いつて俺を見ながら何度も何度も訴えるんだ。俺はだんだん、お袋に会うのが怖くなつて、ろくに見舞いも行つてやれないまま、一年前、死んだ」

マリ子「……」

望月「しばらくはお袋のこと恨んでたよ。

どうして今さらそんな告白したんだって。

そんなの黙っているのが親の愛情だろう。でもだんだんわかつたんだ、お袋の気持ち。お袋は俺を育てながら、憎しみをずっと、心の奥にしまつてた。もうすぐ死ぬつて分かつて、やつと外へ出したんだ。俺はそれを受けとめてやるべきだった……」

マリ子「……」

望月「ある日俺は、俺の父親でもあり、お袋が憎んでいた男を探す事に決めた。家族には出張つて、嘘ついて何度か函館にも足を運んだ。そしてとうとう見つけたんだ。男の名前とそいつが今も函館の北の海辺の町に住んでること……」

マリ子「……」

望月「でもそこまでだ。復讐なんて出来な

かった。俺には子供がいる。まだ七歳だ。それを捨てることなんて出来ない。だから自分に言い訳するように、もしも、もうすぐ死ぬってわかったら、そのときは、お袋のために復讐しようって、そう思うようにしたんだ」

マリ子「……」

望月「この話し、妻にも話したことない」

マリ子「どうしてわたしに？」

望月「だって俺の憎しみ、分けてあげるって言っただろ」

マリ子「……嬉しいな。じゃあ、わたしが代わりに復讐してあげるよ」

望月「はあ？ 何言ってるんだよ」

マリ子「だってもうわたしの憎しみでもあ
るんだよね？」

望月「馬鹿言うな。マリ子はマリ子の幸せ
見つけるよ……て、俺が言える立場じゃ
ないよな。ごめん」

マリ子「あやまらないで、悲しくなる」

望月「なあ、俺たちの関係、このまま続け
て行くのってやっぱり」

マリ子、望月の唇にそつと人差し指
を押しあて、

マリ子「虫が止まりました」

望月「……面白いなあ」

○軽トラック・車内

真司、車を運転しながら聞いている。

マリ子「その三か月後、彼は死んだの。ハ
ンドルを誤った車が信号待ちをしてた彼
を撥ねた」

真司「……」

マリ子「それから、わたしは仕事を辞めて、ネットでこの辺りの貸家を探した。そしてたら偶然同じ姓の家が見つかって、こんな場所じゃ、見ず知らずの人間が突然引っ越して来たら不審に思われるかもしれないし、もし、あの家の親戚の人か何かって思われたら都合がいいなって思ったの」

真司「それでパソコンの相談所を？」

マリ子「わたしに出来るのそれしかないし」

真司「全部、その不倫相手の復讐のため

……」

マリ子「でも気がついたら別の復讐してた

……面白いね」

真司「面白くねえよ……」

マリ子「ごめん、巻き込んで」

真司「俺は別に……」

マリ子「ほんと、ごめん」

真司「……それで、見つかったのか？ その不倫してた男の復讐相手、というか、父親」

マリ子「ううん。もしかしたら、もういいのかも」

真司「それでいいよ。そんなのマリ子ができることない」

マリ子「もういいの。それより、こっち終わらせよう。最後の一人、斉藤さん。そこを右に曲ったとこ」

真司、右に切ると、目の前に霊柩車が停まっただけで、急ブレーキをかける。

霊柩車の運転手「すみません、向こうの道

回ってください。どうもご迷惑かけます」

マリ子「どうしよう……」

真司「俺ん家、来いよ」

マリ子「え？」

真司「今度は復讐とかじゃなく、ちゃんと

一緒に仕事って言うか、俺たち絶対上手

くやれる気がするんだ」

マリ子「どっち、仕事？ プライベート？」

真司「……どっちも」

マリ子「ありがとう、真司」

真司「え、どっちが？」

マリ子「どっちも。嬉しい、すごく」

真司「ほんと？ じゃあ、決まりだ。よし、

飲みに行こうぜ」

マリ子「ごめん、まだ出張サポート、一件

残ってるんだ」

真司「誰？」

○斉藤家・表

葬儀の門飾り。

会葬者が見送りに出ている。

○軽トラック・車内

ぼう然と見る、マリ子と真司。

真司「……これで終わりか？」

マリ子「……そうだね」

○藤田家・表

真司の軽トラックが停まる。

降りる、マリ子。

真司「どうすんだよ、これから？」

マリ子「金目さん」

真司「あんなスケベじい、すっぱかせよ、復讐はもう終わったんだろ」

マリ子「そうもいかないよ。仕事だもん。

明日でもいい？」

真司「わかった。じゃあ、また明日な」

マリ子「うん、また明日」

真司、車を出す。

マリ子、寂しげに見送る。

そのまま、表の自転車に乗っていく。

パラパラとめくる。漁業組合の名簿。

それぞれの名前の横には、マリ子が書いた、○や×が記されている。

と、何かに思い当たり車を急停止する、真司。

ノートのページをめくりながら、

真司「金目……金目……金目……」

しかし、どのページにも金目の名前はない。

真司「……ないよ」

○軽トラック・車内

口笛を吹きながら運転する、真司。

ふと助手席を見ると、マリ子、ノ

トを忘れている。

真司、運転しながら、ノートを取り

○国道278号線・南茅部

真司の軽トラック、Uターンして、

もと来た道を引き返す。

○金目家・表

マリ子の自転車が停まっている。

○同・寝室

裸のまま、布団にうつ伏せの、金目。

マリ子、金目の腰をマッサージしている。

金目「(白々しく)なんだ、今日はパソコン使わないのか？」

マリ子「だって約束しましたから。特別サ―ビスしますって」

金目「嬉しいねえ。ああ、いいよ、そこ」

マリ子「金目さんて、お子さん、いらっしやらないんですか？」

金目「冗談じゃねえ、そんなのいるか。まあ、俺の知らねえところにいるかもしれねえけどな」

マリ子「昔はすぐモテたんですよね？」

金目「まあ、モテたかモテてないかっていうと、モテただろうな」

マリ子「武勇伝とか聞かせてくださいよ」

金目「武勇伝ってほどじゃねえけどよ、昔な、料亭で働いてたころ、その辺りじゃピカ一の芸者が座敷に来てたんだ。その女が、いつも俺のことを誘うように見てたから、ある晩、ご希望通り誘ってやったのさ。普段、お高く止まってる芸者女もよ、服を脱いじまえば同じ獣だな」

マリ子「……そんなこと言っつて、本当は金目さん、襲ったんじゃないんですか？」

金目「どっちだって同じだ。ヤっちゃまえばその気があつたってことだろ」

マリ子「……面白いなあ」

金目「おい、そんなことより、まさか、こんなマッサージが特別サービスとか言うじゃないだろうな？」

マリ子、金目のお尻辺りを軽くつねって、

マリ子「大丈夫。もうすぐ、気持ちよくなりますよ」

金目「おいおい、興奮してきたぞ。早くやれ！

ほらやれ！」

マリ子「じゃあ、お言葉に甘えて」

○同・表

真司の軽トラックが停まる。

真司、急いで降り、金目の家に入る。

襖を開ける、真司。

マリ子、金目の首を絞めている。

真司「！」

金目「く、くるし……」

マリ子、目を見開いたまま、力を込めつつづける。

真司「何やってんだ！」

真司、マリ子を引き離そうとするが、

マリ子、離さない。

金目「や……やめ……」

マリ子「邪魔しないでよ！ やつと自分の復讐が出来るようになったの！」

真司「お前の復讐じゃないだろ！ これだ

って他人の復讐だろ！」

マリ子「……」

真司「お前、何してんだよ！ 人の復讐ば

○同・寢室。

「つかり引き受けて！」

真司、マリ子を強引に引き離す。

金目、苦しそうに咳込む。

放心したように、その場でぐったり

とする、マリ子。

○空き地（2013年）

車にもたれたまま、ぼおつとしてい
る、前川と松本。

そこへ黒塗りの車が来て停まる。

運転手が降り、後部座席を開けると、

中から、スーツに身を包んだ、みつ

ゑが降りて来る。

みつゑ「ごめんなさい、お待ちせしちやつ

た？」

前川「あ、いいえ」

みつゑ、名刺を取り出し、

みつゑ「ミッツ・インターナショナル、代
表取締役、秋川みつゑです」

○ミッツ・インターナショナル・表

海辺の町に不釣り合いな、近代的な
ビルディング。

松本の声「三年前、資本金一千万で設立、
当初は、高齢者向けのパソコン教室や出
張サポート業務を行ってましたが、一年
前、IT専門のシルバーアウトソーシン
グを展開、現在、函館市内、約百社に人
材を送り込んでいます」

○同・受付／研修ルーム

入って来る、みつゑ、前川、松本。

松本「ちなみに、我が道南新聞社にも、二名、

ミッツさんからスタッフをお借りしています」

みつゑ「お世話になっております」

前川「いや、冗談抜きで若いアルバイトより、

よっぽど役に立っていますよ」

みつゑ「それはよかった。さあ、こちら研修

ルームです」

みつゑ、研修室のドアを開けて入る。

○同・研修ルーム

中にはパソコンが並び、高齢者がト

レーニングを受けている。

みつゑ「ここで弊社のスタッフ研修を行っ

てます。間宮さん、いかが？」

高齢者にパソコンを指導しているの

は、間宮。

間宮「みつゑさん、まずまずだ。これから

パワポのトレーニング」

みつゑ「よろしくお願いします」

松本「講師の方も高齢者なんです」

みつゑ「若い人が教えると、効率が悪いの。

お年寄りみんな、スローモーションで

ものを考えてるって勘違いするのよ」

松本「ああ、わかります。つい耳元で、聞

こえますかー、とか言いいそうになりま

す」

前川「おい」

松本「あ……すみません」

みつゑ「いいのよ。でも、ちゃんと教えれば、

年寄りだって捨てたもんじゃないわよ」

前川「やっぱり社長、自らが考案した特別

なメソッドが？」

みつゑ「もちろん、あるわ。でもわたしが考えたんじゃないの。前にこの町でパソコンの出張サポートやっていた方の教え方。わたしもその人にパソコン、学んだのよ」

前川「もしかして、その人？」

みつゑ「さあ、詳しいお話は会議室でやりましょう」

○同・会議室

会議室に入って来る、みつゑ、前川、松本。

中ではスーツ姿の真司が待っている。みつゑ「紹介します。専務の横山です」

真司「(名刺を出し)横山です。今日は遠い所、

おこしいただきありがとうございます」

前川と松本、みつゑと真司の向かいに座る。

みつゑ「それで、取材のテーマは何だったかしら？ 確か、函館ITの未来？」

前川「ええ、まあ。それもあるんですが、実はもうひとつ別件でもお伺いしました」

みつゑ「別件？」

前川「藤田マリ子という女性をご存知でしょうか？」

みつゑ「……」

真司「……」

前川「五年前、この町でパソコン相談所を始め、一年後、殺人未遂で逮捕された女です」

みつゑ「どうしてそんなこと、お知りにな

りたいの？」

前川「実は、あの事件の事、調べてまして。

彼女と、この町で高齢者のパソコン利用

率が飛躍的に伸びたことにはやはり何か

関係が？ ウワサでは老人たち相手に詐

欺まがいな方法でパソコンを売っていた

と」

真司「詐欺まがたって、アンタな」

みつゑ「横山さん」

真司「……失礼しました」

みつゑ「確かに少し強引だったところはある

かもしれないわね。でも詐欺まがたって

言うのはちよつと可哀想」

真司「パソコンは業者から買った値段でそ

のまま譲ってましたから」

前川「やけに詳しいですね？」

真司「いや、まあ……」

前川「でもサポート契約を無理やり結んで

いたとか」

みつゑ「マリ子さん、パソコンを買った人

に初回だけ無料で教えてたの。それが教

え方がとっても上手で、その一回で基本

的な事全部教えてしまうのよ」

前川「……なら、そんな女性がどうして殺

人未遂なんか」

みつゑ「……それはわたしにもわからない。

でもひとつだけ言えるのは、マリ子さん

は、この町をガラリと変えてしまったの」

○（イメージ） 間宮家・居間

間宮の隣で熱心にパソコンの操作を

教えている、マリ子。

間宮、マリ子の話しを聞きながら、だんだんとパソコンに興味を持ち始める。

○ミッツ・インターナショナル・会議室

前川「その藤田マリ子、一年前に出所して
ます。もしかしてどこにいるのかご存知
では？」

みつゑ「ええ、マリ子さんなら、ここに
ますよ」

前川「えっ！」

○同・社長室

入って来る、みつゑたち。

みつゑ「どうぞ」

しかし、中には誰もいない。

前川、回りを見回ししながら、

前川「あの、どこに？」

みつゑ「あそこです」

みつゑの指さした先、壁に飾った額
縁。

額縁の中には一枚のパンティが飾られてい
る。

ポカンと見つめる、前川と松本。

前川「パンティ……」

○とあるパソコン教室

キッズ向けのパソコン教室。

パソコンの前で操作をする、小学校
低学年ぐらいの子供たち。

と、生徒Aが突然、泣きだす。

パソコン講師が来る。(顔は見えない)

講師「どうしたの？」

生徒A「僕のデータ消されたんだ。まだ保

存してなかったのに！」

隣の席の生徒B。

生徒B「だってこいつ、俺のモニター見て

笑うんだもん」

講師「でも大切なデータ、消すのはよくな

いな。わかった、じゃあ、先生が復讐し

てあげようか？」

生徒B「え……」

講師、生徒Bの目線に屈みこむ。

不敵な笑みを浮かべる、マリ子。

マリ子、手のひらを広げて生徒Bの

頬をギュッと挟む。

マリ子「目を閉じて」

生徒B、恐々としながら、ギュッと

目を瞑る。

○暗転

マリ子の声「なぐんちやつて」

(終)

本電子書籍は、2013年12月6日発行の『第19回函館港イルミネーション映画祭2013 第17回シナリオ大賞・受賞作シナリオ集』より、審査員奨励賞受賞作品を抜粋したものです。

シナリオ集のお求めや、作品の映像化につきましては、本映画祭函館事務局までお問い合わせください。

第19回函館港イルミネーション映画祭2013
第17回シナリオ大賞 審査員奨励賞受賞作品

マリーパソコン相談所

作：村口 知己

※本作品の無許可掲載・転用を禁止します

2014年4月1日 電子書籍版発行

発行：函館港イルミネーション映画祭実行委員会 函館事務局

〒040-0055 函館市末広町4番19号（函館市地域交流まちづくりセンター内）

電話 0138-22-1037 <http://hakodate-illumina.com/>

制作：株式会社新函館ライブラリ

〒040-0051 函館市弁天町4番8号

電話 0138-84-1620 <http://www.nhakodate.com/>
